

2018年3月11日聖学院教会聖日礼拝説教

「震災から復興へー若い力ー」

イザヤ書 11章 1-10節

菊地 順

本日は、東日本大震災が起こった3月11日の聖日礼拝です。そのため、聖学院大学と共同して、そのことを覚える礼拝として守られることになりました。したがって、本日の説教は、通常のものとは異なり、東日本大震災に多くを触れながら、話を進めさせていただきます。

改めて申し上げるまでもなく、東日本大震災は、2011年3月11日、金曜日、午後2時46分に発生しました。おそらく、ここに居られる皆さんは、その時のことを今でも鮮明に思い起こすことができるのではないのでしょうか。聖学院大学では、ちょうどそのとき、大学院の研修会が、教授会室で行われていました。私は、そのとき、地震の状況を確認しようと思い、すぐにキリスト教センターに向かいましたが、センターではすでに職員たちがテレビをつけ、ニュースを見ていました。そして、それからしばらくして、津波が発生したというニュースが流れ、ヘリコプターからの中継がテレビに映し出されました。そこには、津波が一気に広い田畑に流れ込んでいく様子が映し出されており、その津波の量とスピードに圧倒される思いがしました。あの地震とき、このチャペルを中心とする、この一角も大きく揺れ、その痕跡が今でも、教授会室の外側の通路に残っています。

あれから丸7年が経ちました。大地震、大津波、そして原発事故による放射線被害、この三重の苦しみが、被災地を始めとして、日本全土を襲ったのです。死者行方不明者は1万8千人を超え、建物の倒壊も、半壊を含めると40万戸を超え、避難者もピーク時には40万人を超えました。瓦礫と化した町々は、正に戦後の焼け野原と同じような有り様でした。まだまだ寒い季節、愛する者を失い、家を失い、生活を失い、思い出や喜びを失った人たちが、深い悲しみと絶望の中に陥られたのです。それは、正に、激震でした。一人ひとりの人生を根底から揺り動かし、日本社会をその根幹から揺り動かした、突然の激震でした。あから7年経ったのです。この期間、わたしたちの教会でも、祈りと共に、募金という形で支援を続けてきました。また聖学院大学でも、震災直後から、物資の支援を始め、間もなくして、岩手県の釜石市にボランティアに行くようになりました。そして、その後、特に釜石市の鶴住居地区を中心に、ボランティア活動を展開することになり、今日に至っています。震災の翌年、2012

年には、ボランティア活動支援センターが立ち上げられ、学生・教職員が一体となった活動が始まり、年にほぼ3度、大きなプロジェクトを組み、支援活動に取り組んできました。そして、釜石市以外にも野田村とか、その他の地域で、個人やグループで、いろいろな活動を展開してきました。

私も、震災の年の12月から、サンタプロジェクトという名称でのボランティア活動に参加し、その後も春や夏に継続的に参加してきました。その後、しばらく中断の期間がありましたが、昨年12月、4年ぶりにサンタプロジェクトに参加しました。4年ぶりを見る釜石市は、大きく変化していました。何よりも街並みが整備され、震災の傷跡はほとんど見ることはできませんでした。ただ、街全体は、再開発のため、山が削られ、高台が作られ、新しい街並みが現われていました。また海岸には、高く分厚い防波堤が延々と造られ、人工的な無機質的な光景が続いていました。

12月のサンタプロジェクトに参加したのは、本学の学生28名と教職員9名、それに外部の高校から3年生3名と校長先生が加わり、総勢41名でした。このプロジェクトは、2011年の12月から毎年行っていて、7回目を迎えたプロジェクトでした。12月1日金曜日の夜、バスで出かけ、土曜日には、地元のお母さんたちと郷土料理を作ったり、地元で始められたシイタケ栽培の手伝いに行ったり、午後には地元の人たちと交流会を持ったり、また日曜日には地元の子どもたちを招いてクリスマス会を行ったり、仮設住宅の掃除をしたりと、いろいろな活動を行ってきました。

先にも触れたように、聖学院大学では、特に釜石市の鶴住居地区というところを中心にしてボランティア活動を行ってきましたが、この地区は500名以上の方々が津波で亡くなられたところで、被災地の中でも亡くなられた方の多い地域の一つです。しかし同時に、この地域は、すでに伝説的ともなっている「釜石の奇跡」と呼ばれている出来事があったところでもあります。

皆さんの中にも、すでに聞いたことがある人も多いかと思いますが、「釜石の奇跡」というのは、津波が押し寄せてきたとき、鶴住居地区にある釜石東中学校の生徒・教諭と、それに隣接する鶴住居小学校の児童・教諭の約600名が、高台の避難所まで逃げて、全員が助かったという出来事です。しかも、これは、たまたま助かったというのではなく、日ごろの防災教育と避難訓練が実を結んだ結果であったのです。

当時の新聞記事によりますと、釜石東中学校では、震災が起こる4年前から防災教育に力を入れ、避難訓練だけではなく、津波のメカニズムを学び、通学路の防災マップを作成するなど、かなりの時間を防災教育のために用いてきました。そして、地震の当日には、学校には212名の生徒と17名の教員がいましたが、地震の揺れがまだ完全に収まらないうちから全員が走りだし、副校長の

(村上洋子先生の)誘導の下、隣接する鵜住居小学校の児童たちにも呼びかけ、一目散に約700m離れた最初の避難所まで逃げたのです。しかし、遠くに津波が押し寄せるのを見て、そこからさらに500m離れた高台の避難所まで逃げました。そして、津波はその高台の下まで到達しましたが、全員が助かったのです。津波がさかのぼった距離は、何と2.5kmもありました。その高台からは、海は全く見えません。しかし、津波は川をさかのぼり、その途中にあった中学校や小学校を飲み込みながら、陸の奥深くまで到達したのです。おそらく、避難が遅れていたら、多くの犠牲者が出たものと思われる。

事実、この中学校から600mほどしか離れていないところにあった、海に近い防災センターに逃げ込んだ人たちは、多くが帰らぬ人となりました。そこは、あくまでも、大雨や土砂災害のための避難所で、津波の避難所ではなかったからです。しかし、日ごろの津波の避難訓練では、そこが避難所として使われていたため、津波の当日、多くの人たちがそこに誤って逃げ込んだのです。そして、その多くが犠牲となったのです。しかし、釜石東中学校や鵜住居小学校の生徒・児童たちは、日ごろの訓練通り、決められた高台に逃げ、そして全員が助かったのです。

ところで、この「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事は、それだけではありませんでした。今年の12月に訪問したとき初めて知ったことですが、津波の当日、釜石市役所の近くにある高台に逃げ込んで助かった人たちも多くいました。しかし、助かった人たちの中には、子どもたちに強く勧められて高台に逃げて助かった大人たちが少なからずいたのです。大人たちの中には、津波警報が出たとき、高をくくって高台に行こうとしなかった人たちがいました。しかし、それを見た何人かの小学生が、高台に行くように叫んだのです。しかし、大人たちは、高い防波堤があるから大丈夫だと言って、それに応じなかったのです。しかし、それを見た小学生たちが、今度は泣いて訴えたというのです。そこで、大人たちも、子どもを泣かせては可哀そうだと思い、高台に避難したのだそうです。そして、その直後に大津波が押し寄せ、あつと言う間に高台の下まで津波が到達したのです。もし子どもたちが泣いて訴えていなかったならば、間違いなく、少なからぬ大人が犠牲になっていたと言われていています。子どもたちは、津波の教育を受けていたのです。その恐ろしさを教わり、実際どう行動すべきかの訓練を受けていたのです。そうした努力が、子どものみならず、大人たちをも救うこととなったのです。

今回、この話を聞いて、改めて教育の大切さを感じました。そして、子どもの素直さが持つ力の大きさを感じました。先ほども触れましたが、釜石では、こうした子どもたちの奇跡があった一方で、防災センターに逃げ込んだ人たちの悲惨な出来事があったのです。そして、その大半は、大人たちでした。子ども

もよりも分別があり、行動力もある大人たちが、そうした悲劇に巻き込まれてしまったのです。

ところで、昨年12月、わたしは4年ぶりに釜石を訪れたのですが、2つの点で大きな衝撃を受けました。一つは、すでにお話ししたように、目覚ましい復興が見られたということです。街並みだけではなく、JR釜石駅には立派なホテルが建てられていました。6年半が経ち、着実に復興が進んでいるとの印象を強くしました。反面、町中に、あまり人が見られなかったのは残念でした。やはり人口が減少しているようで、町を離れて行った人たちが再び戻り、昔ながらのにぎわいを回復するまでには、まだまだ長い時間がかかりそうだと印象を受けました。しかし、もう一つ衝撃を受けたことがあります。それは、若い人たちの参加です。以前、釜石市に行った時は、仮設住宅を訪問したり、子どもたちのクリスマス会を行ったりと、接するのは大体お年寄りか子どもたちでした。しかし、今回、何と地元の高校生たちが参加してくれたのです。そして、その中には、釜石の奇跡を経験した元小学生たちもいたのです。

土曜日の午後、私たちは地元の人たちとおしゃべりをする<トーク・フォークダンス>というのを開催しました。椅子を二重に円形にならべ、内側と外側にそれぞれ釜石の人と、私たちが座り、一人1分ずつ、司会者の出すテーマに沿って話し、終わったら私たちが隣の席に移動し、また1分ずつ話すというおしゃべりの会でした。そのようにして、1人合計12、3人と話したでしょうか。そういう会を持ったのです。そして、そのおしゃべりの会に、地元の大人たち約20名に加え、私たちの呼びかけに応じて地元の高校生が15名参加してくれたのです。その内、14名が女子生徒でした。皆、進学校で有名な釜石高等学校の1年生の生徒で、学校が休みであったにもかかわらず制服を着て、集団で参加してくれました。わたしも、4、5名の女子生徒と話をしました。正直、初めはどうなることかと心配でしたが、皆とても快活で、しっかりしており、とても楽しい語り合いの時となりました。そして終わったとき、何か全体が一体化したような感じがして、非常に満たされたものを感じました。そして、同時に、これこそが「希望」だと感じました。それは、先ほども触れましたように、以前は、お年寄りと子どもが接する主な対象でしたが、今回、若い世代に接し、震災から6年半が経つ中で、次の世代を担う新しい力が確実に台頭してきたのを強く感じる事ができたからです。

確かに、町や道路が整備され、高い防波堤が築かれ、商店街が再開され、町に活気が戻って来ることも大事です。しかし、何よりも勇気と希望を与えてくれるのは、若い世代の台頭ではないでしょうか。次の時代を担う若者たちが成長し、自分たちの町に関心を持ち、自分たちも町のために何かしたいと思うことこそが、本当の復興を推し進める力となっていくのではないのでしょうか。

このとき集まってくれた生徒たちは、翌日行われた仮設住宅の掃除にも参加してくれました。そして、その後の事として、そうした生徒たちが中心となり、聖学院大学の学生たちの支援を受けながら、自分たちの経験を生かし、地元の小学生たちに津波のことを伝えて行こうと計画していました。そして、この計画は、今年の2月の末に、実際に実現されることになったのです。その様子は、NHKの朝の番組でも紹介されましたが、3月8日の埼玉新聞にも「学生の活動、発展に力」「被災地の高校生を支援」とのタイトルで紹介されました。その一部を、少しだけ紹介します。

講師役を務めたのは東日本大震災で中学生の兄に手を引かれ、高台に避難した経験がある県立釜石高校2年の佐野里奈さん(17)ら地元の高校生たち。「自分たちも命を助けてもらった。次は私たちの番」。そんな思いから、佐野さんの母校の市立鶴住居小学校の児童たちに紙芝居やクイズ形式で、自らの経験を伝えた。----高校生たちの活動を裏方としてサポートした聖学院大学(上尾市)4年の益田裕輔(ゆうすけ)さん(22)は、その様子を温かく見守る。

そのように、記事には書かれています。震災時、小学生だった子どもたちが、6年経って高校生になり、自分たちも命を助けてもらったのだから、今度は自分たちが助ける番だと思い、自分たちの経験を踏まえて、小学生たちに津波の経験を伝えて行こうと活動を始めたのです。何と、頼もしいことではないでしょうか。そして、そこには、何と確かな希望があることでしょうか。被災した地域の中から、若い世代が起こってくる。しかも、その被災という重荷を、自ら担おうとして立ち上がってくる。これこそ、大きな力、希望ではないでしょうか。

ここで、アメリカの公民権運動の指導者、マーティン・ルーサー・キングの言葉を引用するのは、あまり適当ではないかもしれませんが、キングは、こういうことを言っています。それは、真の自由というのは、決して、抑圧者の側から与えられるものではない、それは非抑圧者が自らの力でもって獲得して行かなければならないものだ、ということです。これは、アメリカの人種問題に関して言われたことですが、私は、被災地のことを考えるとき、一脈通じるところがあるように思うのです。それは、復興と言うのは、決して外部からの援助だけでは完成しないということです。むしろ、それは内部から復興の力が湧き上がってきて、自らそれを実現して行かない限り、本当の復興にはならないということです。もちろん、この7年間、被災地は全力で復興に取り組んできたと思います。そのことを、微塵も疑うものではありません。しかし、そうした努力に加え、今、新しい若い世代が台頭してきたのです。そして、今回の経

験を通して、改めて、地元の、そうした次世代を担う若い力の台頭こそ、本当の復興の担い手ではないのかと深く感じたのです。そして、わたしたちのボランティア活動も、そうした力が台頭してくるのを継続的に支援することではないのかと、改めて感じました。

若い力の台頭、それは、長い人類の歴史においても、絶えず、いつも、待望されてきたものではないでしょうか。時代が混迷し、時代が行き詰まる度に、新しい若い力が待望されてきたのではないのでしょうか。先月は、韓国で、冬季オリンピックが開催されました。羽生結弦選手たちの若い力に、日本中が熱狂したのではないのでしょうか。そして、昨年来、将棋の世界では中学生の藤井六段が、先日も羽生永世七冠を破り、破竹の勢いで勝ち続けています。それは、従来の秩序を覆す力であるとともに、また新しい時代をもたらす力でもあるのではないのでしょうか。そして、どの時代も、そうした力を待望しているのではないのでしょうか。

12月にサンタプロジェクトに参加して、そうした若い人たちの出現に接し、私自身が大きな励ましと希望を与えられたように感じています。そして、その希望を感じながら思ったことは、そのとき、ちょうどクリスマスのシーズンでしたので、クリスマスの喜びもこのことに通じているということでした。クリスマスは、一人の幼子がこの世に誕生したことをお祝いする時です。しかも、その幼子が、人類をその罪の捕らわれから救い出す、救い主であったのです。そして、そうした救い主の誕生こそが、人類の歴史に、真実の喜びと希望を与えてくれるものなのです。先ほど読んでいただきましたイザヤ書 11 章には、この救い主の誕生を予告する言葉が記されています。そして、それは、エッセイの株の根から萌えいでる「ひとつの若枝」として語られています。エッセイとは、イスラエル王国の第 2 代の王となったダビデの父親の名前です。そのダビデ家から救い主としての幼子が生まれると言うのです。そして、その幼子の上には、「知恵の霊と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、恐れ敬う霊」が満たされ、その幼子は「弱い人のために正当な裁きを行い」「この地の貧しい人を公平に弁護する」と謳われています。昔の口語訳聖書では、「正義」と「公平」を行う者として描かれています。そうした新しい時代を開く命が、クリスマスに誕生したのです。そして、そうした正義と公平を行う命こそ、私たちにとっての真実の希望であり、その誕生は心からの喜びなのです。

すでに、クリスマスの時期は過ぎましたが、私たちは、この約束された命が、私たちの救い主イエス・キリストとして与えられていることを知らされています。そして、イエス・キリストは、永遠に救い主として、私たちと共に歩んで下さっているのです。永遠に変わることなく、希望の光として、私たちを照らし、私たちの歩みを導き、私たちが年老いても、永久に変わることなく、私た

ちと共に歩んで下さるのです。私たちの永遠の救い主として、臨在されているのです。そこに、私たちの内なる希望、内なる力があります。そして、そこに、本当の意味での新しい力、若い力もあるのです。なぜなら、若い力とは、決して年齢的なものだけではなく、むしろ、神によって新たに強められた新しい力こそ、若い力であると言えるからです。そうした若い力によって、私たちは、内側から立ち上がらされ、人生の課題と重荷を担い得るものとして歩むことができるのです。そして、そうした主によって強められた若い力こそ、すべての人が本当に必要としている力ではないでしょうか。もちろん、若い世代が台頭してくることは大切です。しかし、そうした若い世代も、内から強められていかなければ、いつかは立ち行かなくなってしまうのではないのでしょうか。私たちは、内なる力を必要としているのです。そして、そうした内なる若い力を得て、私たちは初めて、互いに助け合い、愛し合い、この地上に愛の共同体を作って行くことができるのです。

東日本大震災からの復興は、まだまだ道半ばだと思います。しかし、わたしたち一人ひとりが、主の助けを受け、内側から強められ、新しい力を与えられながら、内なる力を持つ若い世代が成長していくように、互いに励まし合い、支え合っていくことが、大切なのではないのでしょうか。そのようにして、これからも、被災地のことを覚え、祈りつつ、支援して行くことができればと思います。それでは、最後に、被災地のことを覚え、皆さんと共に、祈りを捧げたいと思います。